

見た・聞いた・考えた

― 北欧の福祉・教育を考える旅から ―

〈寄稿〉 全障研事務局長 蘭部英夫さん

④ ゆるがない 社会システム

私の住む町(東久留米市)は、保育園の「民設民営化」でゆれている。狙われたのは我が娘の母校。今の市長は、大型ショッピングセンター誘致見直しや「市民参加と市民対話」を公約にしてみんなで当選させた若手だ。なのに「変節」「裏切り」「居直り」「詐欺」だ！。説明会会場にあふれた百名をこえる保護者たちは、震える手でマイクを握り、それぞれ言葉で公立保育の大切さを訴えていた。

「民間でできることは民間で！」という小泉首相が絶叫した新自由主義は、けっこう深く浸透している。でも、民間は儲からなければやめる。民間にはできないこと、競争や儲けにそぐわないもの、それは保育や教育、医療や福祉。それを社会システムとして徹底しているのが北欧だ。

昨年9月に訪問したデン

マーク・ミデルファート市(人口4万)の小さな「森の保育園」には笑顔と歓声があふれていた。3歳児から就学前の30名の子もたちと5人のスタッフが自然の中で遊んでいた(日本の職員配置基準は1948年に決められたままの30対1だ)。子どもは社会の宝、子どもは未来だ。だから税を投入して手厚く育てられ



写真1 子どもたちは未来だ

写真2 オセロ全景



ている。

隣町のフレデリシア市(人口4万)の高齢者介護付集合住宅「オセロ」。ロンドンにあるグロブ座からヒントを得たという素敵なデザインだ。2階から6階が住まいで119戸。スタッフは150名。65歳以上の年金者には公的補助がある。各階には2か所共同の居間があり、台所では職員といっしょに食事を用意することもできる。

「みんなで居間にいて、自分の部屋で寝る。そういう生活リズムをいかしたい」と施設長のグレテは言う。オセロの目標は、住んでい

であるとともに、スタッフにとつても価値ある職場。その実現が「私たちのミッション(使命)なのです」。「スタッフにとつてもよい職場とは？」と質問すると、「職員が喜んで意見を出せて、その意見が活かせる場、身体に負担がかからないような介護機器等の充実。長い間、喜んで仕事のできる場です」と彼女は答えてくれた。

だれもが年をとる。だれもが障害を持つ可能性がある。だから、みんなで支え合う。じつにシンプルなことが、みごとに実践されていた。

こうしたゆるぎない社会システムはどうしてつくられたのだろう。一冊の本から学んだことがある。エミー・E・ワナー著『ユダヤ人を救え！ デンマークからスウェーデンへ』(水声社)。1943年9月から11月。300隻の漁船が7220人のデンマークのユダヤ人と家族680人を中立国・スウェーデンに秘密輸送し、9割以上が避難に成功した。学校、療養所、市民病院は避難所を積極的に提供した。なぜユダヤ人を助ける苦勞をしいこんだのか？と問われたある女教師

は、「それが私の義務だと思っただけです」。それが普通の、市民のあたりまえの声だった。

そうしたレジスタンス運動にとびこみ、ナチスの強制収容所に収容された青年にバンク・ミケルセンがいた。彼は、戦後、知的障害者親の会運動を担い、後に社会大臣となり、ノーマライゼーションIIすべ

ての人に自由と独立を！(日本のマスコミは「脱施設化」と一面的にしか報じない)を推進し、世界の障害者権利保障運動に大きな影響を及ぼした。



写真3 オセロで暮らす